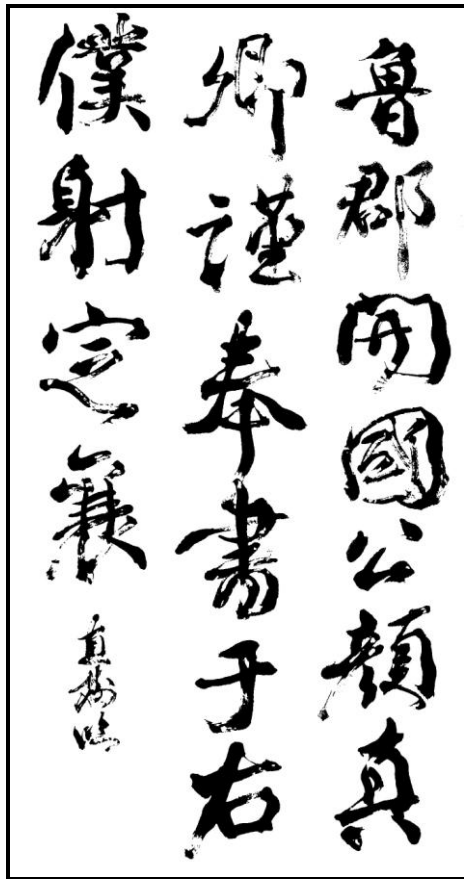


臨書 行書 顔真卿『争坐位文稿』 全紙

「魯郡開國公顔真卿謹奉書于右僕射定襄」

愛しの『祭姪文稿』をひとまず卒業し、「基本」とされる『争坐位文稿』に取り組んでいます。『蘭亭序』などにもいえることですが、「基本」であるものほど作品にしにくいものはありません。自分の筆力がそのまま露呈されてしまうからです。今回は拙作となりましたが、めげることなく今後とも精進していききたいと思えます。



牀前の月光疑是地上霜  
舉頭望山月低頭思故鄉

一六、上原達也

創作 行書 李白『静夜思』 2尺×8尺

「牀前明(看)月光疑是地上霜  
舉頭望山月低頭思故鄉」

初めての創作作品です。やはり思った以上に難しく、ようやく辿り着いたのが妥協点。自分の未熟さを実感できました。

なお、「明」という字は中国における解釈で、日本では「看」という字になっているのが一般的です。

十七、西原英臣

臨書 草書 傅山『草書青羊庵七言絶句』

2尺×8尺

「幽花爛熳開春暉、菴主扶藜啓石扉。  
暖雪团团山 菊、香風陣々野薔薇。」

今回も傅山の臨書に挑戦しました。彼の生み出す字間や行間を上手く表現できませんでした。作品製作をする難しさや改めて痛感する一方、傅山作品を製作する上での今後の課題や、創作作品を製作する上で参考になる部分もあり、収穫の多い作品となりました。

幽花爛熳開春暉 菴主扶藜啓石扉  
暖雪团团山 菊、香風陣々野薔薇  
西原英臣 行書 草書 卷三絶句一七 西原英臣

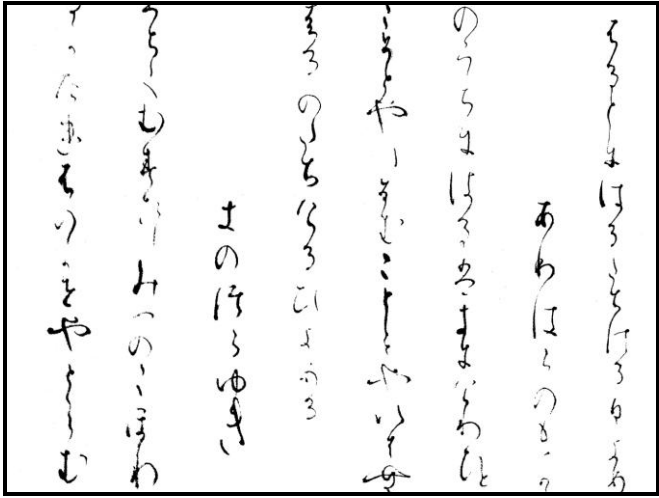
十八、得能麻希

臨書 仮名 伝紀貫之筆『高野切第一種』

30×120cm

「ふる年に春たちける日よめる…」

春休みから書き始めて気付くともう初夏…：月日の経つのは早いなあと思いつながら、季節の移り変わりを歌う八首を淡々と綴ってみました。所々、気に入ったり気に入らなかつたりする点がありますが、限られた時間で書き上げた今の私の渾身の一枚です。書き終えて一言、「長つ……！」



十九、

松永智子

創作 調和体 中原中也『春宵感懐』 半切

「雨が、あがつて、風が吹く。」

雲が、流れる、月かくす。

みなさん、今夜は、春の宵。

なまあつたかい、風が吹く。」

移りゆく空、そこ吹く風に、「なまあつたかい」思いの色がシシクロする。そんな、春の

情景を描きたく墨をすり筆を執りました。

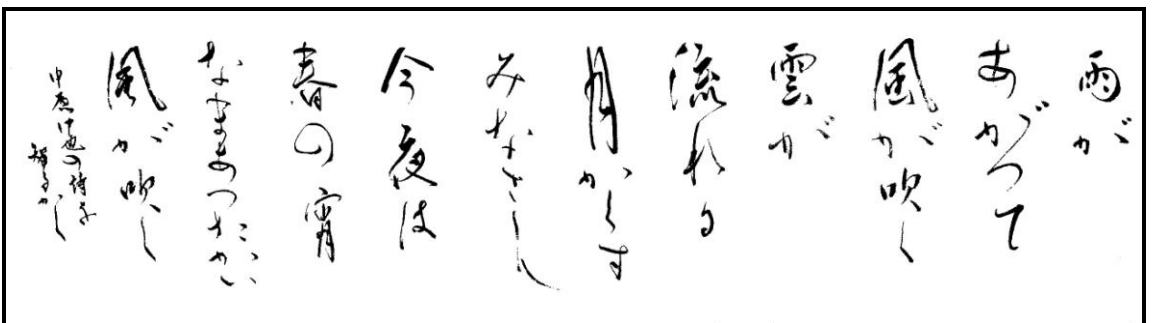
実は、前回の書展でも中也の冬の詩を書いています。その時ある方から戴いた「中也シ

リーズを手がけてみては」との お言葉が、

この『春宵感懐』へのきっかけとなりました。

一期一会を、大切にしたいです。

一期一会を、大切にしたいです。



二〇、鳥越亜希

臨書 行書 米芾『徳忱帖』 半切

「審道味清適」

書の雰囲気と文章の意味で選びました。「道味の清適なるを  
審らか(くわしい)にす」。

いろんなことにそうありたいです。



二二、頓部李歩子

創作 調和体 色紙

「日暮らし硯に向かひて」

大学生は自分の時間がたっぷりあります。去年、私はその  
時間を書道に捧げることを決めました。兼好法師が『徒然草』  
執筆で硯に向かうなら、私はよい作品を作るために硯に向か  
います。

二二、西原英臣

創作 調和体 『白い花』 半切

もう地上では逢えない人へ。



ま、もう地上では逢えない人へ

静かに魂のなづく夜焼野は月の光に  
ぬれ道に歩かず動かぬ私の影は  
紅薔薇の燃える前の日また明日と  
別れた  
散る白い花 金井五持 英臣



二三、北山聡佳

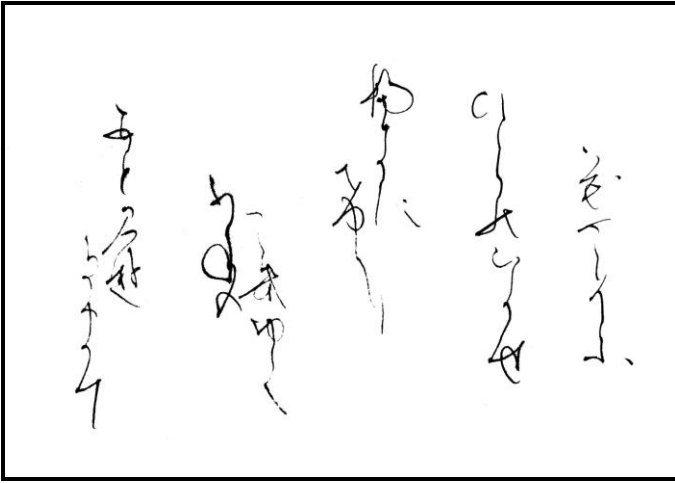
創作 仮名(細字) 『花さそふ』 半懐紙

「花さそふ比良の山風吹きにけり

漕ぎ行く舟の跡みゆるまで」

普段は書く機会の少ない細字にチャレンジしました。ここ数年間研究している香紙切と良寛を参考に、筆勢のある実画の持つ強靱さ、良寛の人生を表わすかのような冷静かつ自由奔放な筆脈を取り入れようと書き進めました。

4月に入部し初めて出品させていただきました。これからさらなる進化を遂げられるよう頑張っていきます。



二四、河島久実子

臨書 篆書(金文) 『中山王鼎』 半切1/2

「人為(ひと)となり」

「会心の出来」からはほど遠いですが、これに決めたのは、この一枚を書いた日のことを、わすれないためです。



二五、三幣剛史・白田全弘

合作・創作 行草書 半切二連

「白蘋千點鷺初散」(三幣)

「紅雨一簾鶯乱啼」(白田)

僕にとっては初めての合作です。合作にはやはり統一感がなければ…との志を持って臨んだのですが、お互い時間が取れずほとんど別々の練習になってしまいました。自分の個性やクセを最大限押さえ、同じ作風にまとめることの難しさを実感しました。(三幣)

「白い蘋花がおびただしく咲いた水面に鷺がいて、まるで花のようだ。鶯のさえずりが止まない中、落花が水面に降りそそいでいる」という意味です。初夏にぴったりの言葉だと思います、書いてみました。(白田)

白頭子結ぶる白散

紅雨一簾鶯鳥亂啼

二六、竹倉功祐

創作 調和体 YUKI『JOY』 半切

「しゃくしゃく余裕で暮らしたい 約束だって守りたい  
誰かを愛することなんて 本当はとても簡単だ」

(作詞:YUKI・葛谷好位置)

兄の結婚式で感じた幸せな気持ちをなにか形に残してみたい  
と思う、柄にも無い歌詞を選びました。

その結婚式翌日にこの作品に取り掛かったのですが、字体  
もタイトルを重ねたことも全てその場の勢いです。ただ、そ  
の後もこれ以上の作品は生まれませんでした。きっとその日  
はまだ心の中に「なにか」が残っていたんでしょね。

